帝京短期大学 紀要 No. 22：85－98，2021

日本文化の母性原理的な性格とその意味

石井　登

帝京短期大学

【抄録】

本稿は，日本文化の「母性原理的な性格」をその歴史的な背景も含めていくつかの角度から検討し，「父性原理的な性格」が強い現代の国際社会の中で，それがどのような意味をもつかを考察する。父性原理は「切断する」働きを特性とし，すべてを主体と客体，善と悪などに分割する。母性原理はすべてを「包含する」特性をもち，包み込んだすべてに平等に接する。世界の様々な宗教そして文化一般は，この二つの原理がある程度融合して働いているが，どちらか一方が優勢で他方を抑圧している場合が多い。

そして，日本文化は母性的な性格が圧倒的に強い。宗教的には，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教などの一神教は父性的な性格が強く，多神教は母性的な性格が強い。日本は，縄文時代以来，豊かな自然と森に恵まれ，多神教的で母性原理の強い文化を育んできた。それは，現代日本人の「甘え」の心理構造や「タテ社会」という社会構造にもよく表れている。

現代の国際社会は，父性原理の力学で動いているといえるが，それは，西欧で繰り返された敵対と闘争と排除の歴史の，負の遺産を引きずっている。その中で日本は，自らが受け継いできた母性原理の文化の意味を充分に自覚し，それをこれからの世界にどう生かせるか，その積極的な意味を模索することが，今後の重要な課題となるであろう。

【キーワード】日本文化，母性原理，父性原理，母性宗教，縄文文化，甘え，タテ社会

Ⅰ．母性原理と父性原理

筆者は，日本文化の特徴の以下のような9項目の視点から総合的に把握することを志している。

(1) 日本文化は一貫して，宗教などのイデオロギーによる社会と文化の一元的な支配がほとんどなく，また文化を統合する絶対的な理念への執着が薄かった。その「相対主義」的な性格は，以下の項目と密接に関連して形成された。

(2) 漁撈・狩猟・採集を基本とした縄文文化の記憶が，現代に至るまで消滅せず日本人の心や文化の基層として生き続けている。

(3) ユーラシア大陸の父性的な性格の強い文化に対し，縄文時代から現代に至るまで一貫して母性原理に根ざした社会と文化を存続させてきた。

(4) ユーラシア大陸の穀物・牧畜文化にたいして，日本は穀物・魚貝型とも言うべき文化を形成し，それが大陸とは違う生命観を生み出した。

(5) 大陸から海で適度に隔てられた日本は，異民族により侵略，征服されたなどの体験をほとんどもたず，そのため縄文・弥生時代以来，一貫した言語や文化の継続があった。

(6) 大陸から適度な距離で隔てられた島国であり，外国に侵略された経験のない日本は，大陸の進んだ文明の負の面に直面せず，その良い面をひたすら尊崇し，吸収・消化することで，独自の文明を発達させることができた。

(7) 海に囲まれ，また森林の多い豊かな自然の恩恵を受けながら，一方で，地震・津波・台風などの自然災害は何度も繰り返され，それが日本人独特の自然観・人間観を作った。

(8) 西欧の近代文明を大幅に受け入れて，非西欧社会で例外的に早く近代国家として発展しながら，西欧文明の根底にあるキリスト教は，ほとんど流入しなかった。

(9)「武道」，「剣道」，「柔道」，「書道」，「茶道」，

「華道」や「芸道」，さらには「商人道」，「野球道」などという言い方を含め，武術や芸事，そして人間のあらゆる営みが人間の在り方を高める修行の過程として意識され，それが日本文化のひとつの大きな特徴をなしてきた。

（1）については，この構想の全体を概観する意図もこめてすでに論じた（帝京短期大学紀要No.21「日本文化の相対主義的性格とその現代的意味」参照）。

本稿では上の9項目のうち，とくに（3）に関係する主題「日本文化の母性原理的な性格」について論じる。

母性原理は言うまでもなく父性原理と対をなす。日本文化を母性原理的な性格のものと理解するということは，他方に父性原理的な文化が存在することを前提とする。この二つの文化的性格を対比させることで日本文化の特徴がより際立つと筆者は考える。

比較文化論において文化を二類型に分ける代表的な例としては，文化人類学者のR. ベネディクトによる，「恥の文化」と「罪の文化」，社会人類学者の中根千枝による「タテ社会」と「ヨコ社会」，地理学者の鈴木秀夫による「森林の思考」と「砂漠の思考」などが挙げられよう。また心理学者・河合隼雄は，日本を「母性社会」と捉え，「父性」原理の社会と比較しながら，日本人の心理を論じている。

最後の「母性社会」という言葉は，河合隼雄がユング派の心理療法家としての立場から現代日本人の心のあり方と日本社会を探る際に用いたものだ[1)]。人間の心の中に働いている多くの対立する原理のうち，父性と母性という対立原理はとくに重要だという。この相対立する原理のバランスの具合によって，その社会や文化の特性が出てくる。心理療法家として登校拒否児や対人恐怖症の人々と多く接した著者は，それらの事例の背景に，母性社会という日本の特質が存在すると痛感した。これらの事例は，自我の確立の問題にかかわり，それが日本の母性文化に根をもつということだ。

母性原理はすべてを「包含する」特性をもち，包み込まれたすべてが絶対的な平等性をもつ。子供の個性や能力に関係なく，わが子はすべて可愛いのだ。しかし母子一体という包み込む原理は，子供を産み育てる肯定的な面と同時に，呑み込み，しがみついて，時には死にさえ到らしめる否定的な面も持っている。

これに対し父性原理は「切断する」働きを特性とし，すべてを主体と客体，善と悪，上下などに分割する。子供をその能力や特質に応じて峻別する。強い子供を選んで鍛え上げようとする建設的な面があると同時に，切断の力が強すぎて破壊に到る面ももっている。

世界の様々な宗教，道徳，法律などは，この二つの原理がある程度融合して働いているが，どちらか一方が優勢で他方を抑圧している場合が多い。河合は心理療法家としての経験から，日本文化が母性的な傾向が強いと認識するに至ったという。

Ⅱ．日本の母性的宗教

宗教学者の松本滋は，宗教心理の研究において「父性的宗教」と「母性的宗教」という語を用いることで，文化類型の根底にある人間心理の深層にまで掘り下げて文化比較を行うことを試みている[2)]。それは，比較文化論と宗教心理学を結びつけ，またそこから日本文化の諸問題を分析する手がかりを提示する試みとなっている。

母性的な宗教は母性原理に基づいた宗教である。それは人間心理の初期の発達段階，自他が分離せず母や母に代表される世界との一体性の状態に関係する。それはまた人間の原初的な自然，そこに生まれて在る故郷（ふるさと），あるいは大地に根ざし，無条件の包容性，寛容性を特色とする。そこでは，神が強力な権威をもって人々を特定の目標へ導くというより，共同体の緊張をゆるめ，調和統合をはかる。その自然的な共同体そのものが母性的なものといえよう。

これに対し父性的宗教は，父親の登場によって原初的な母親的世界との分離が決定的となるエディプス期に特に関係するという。エディプス期とはフロイトの用語で，およそ生後3年から5年までを指す。エディプス・コンプレックスとは，子供が異性の親に性的愛着を持ち，同性の親に敵意を抱くという無意識の心理である。父親に対する愛憎のなかで子どもは，父親の権威を超自我として内面化する。それは父親に代表される社会の規範の内面化でもある。こうした原理と結びついた父性的宗教において神は，

しばしば強力な権威をもった支配者・超越者として描かれる。

母性的宗教・父性的宗教の違いは，価値的な優劣を意味するものではない。それは一種の理念型であり，現実の宗教は両要素がさまざまに交じり合い融合している。ユダヤ教，キリスト教，イスラム教は父性的な性格が強く，母性性を抑圧する傾向があるが，カトリックのマリア信仰は母性的な性格を示す。中国の儒教は父性的な要素が強いが，道教は母性的な要素が強く，民衆に広く支持された。もちろん儒教と道教はたがいに影響し合っている。人間の成長の過程で母性的な要素も父性的な要素もともに大切であるのと同じように，人間の宗教・文化にも二つの要素があり，ともに重要な働きをなしているだろう。

日本の宗教的伝統，そして文化全体の伝統も，かなり母性的な性格が強いのが特徴だ。それは，「あるべきものより，あるがままのものを，規範的な分離よりも自然的なつながりを，自律的な個性よりも包容的な共同体を強調する傾向」が強い。

作家の遠藤周作は，キリスト教への迫害が絶頂に達した頃のキリスト教に強い興味を示し，いわゆる「かくれキリシタン」のキリスト教信仰に見られる母性的な性格を描き出している[3)]。その時代，宣教師は日本を去り，教会も消え，日本人のごく一部がキリスト教をほそぼそと受け継いでいた。宣教師がいないので，信者はキリスト教を自分たちに納得できるように咀嚼するが，それを正統のキリスト教へと是正する指導者はおらず，日本人の宗教意識に合うように自由に変形されていく。

それがどのように変形されたのかに，遠藤周作の関心は集中した。彼らが信じたものは，もはやキリスト教とは言えず，彼らによって日本的に変形された彼らのキリスト教になっていた。仏教や神道の要素がさまざまに混じり合い，キリスト教徒がふつうに信じる唯一絶対神を本当に信じていたのかさえ疑わしいまでになった。

しかも，彼らが役人の目を逃れていちばん信仰していたのは，神でもキリストでもなく，実は聖母マリアであった。さらにそのイメージは，キリスト教の聖母マリアというよりも，彼らの母親のイメージが非常に濃かった。宗教画に見る聖母マリアというより野良着を着た日本の母親のイメージであった。

すでに述べたようにヨーロッパにおいてキリスト教は，母性宗教というより父性宗教という性格を強くもっていた。教えに外れるものを厳しく叱咤し，裁き，罰するイメージである。それが日本では，いつしか母親の宗教に変わってしまう。もちろん聖母マリアは，カトリック信仰の中ではきわめて重い意味をもつが，第一位ではない。その聖母マリアが，「かくれキリシタン」にとっては最重要の信仰の対象となる。しかも日本の「おっかさん」のイメージに変形されてしまうのだ。父性原理の性格を強くもったキリスト教が，日本ではいつのまにか母性イメージの信仰に変わってしまう。それは，日本文化の基底に，そうさせてしまう土壌があるからであろう。

このような変化は，キリスト教以外の宗教への日本人の信仰の場合にも見られる。たとえば，中国・朝鮮をへて日本に入ってきた仏教の場合も似たような変化が見られる。平安時代から室町時代には，仏教も日本人の歯で噛み砕かれ，次第に母性的傾向が強い宗教に変化していった。阿弥陀様を拝む日本人のこころには，子供が母親を想うこころの投影があるのではないか。

浄土真宗の親鸞が「善人なをもて往生を遂ぐ，いわんや悪人をや」というのも，見方によっては悪い子ほど可愛いという母親心理を表していると言えよう。ともあれ「阿弥陀様」には色濃く母親のイメージが漂っている。仏教も日本に流入して日本人に信仰されるうちに，かなり母性的な性格を強くしていったと思われる。

親鸞が六角堂参籠の際にみた夢も，その意味で印象深い。夢の中で救世観音は語った，「たとえ汝が女犯しようとも，私が女の身となって犯され，一生汝に仕え，臨終には導いて極楽に生まれさせよう」と。何という母性的な観音だろうか。女犯を徹底的に受け入れ，許し，そして救済する。行為の善悪は一切問題にされず，あるがままに救われるのだ。キリスト教が，父性原理の宗教という特性をもち，神との契約を守る選民こそ救済するが，そうでなければ厳しく罰するのとは大きな違いだ。

キリスト教にも仏教にも共通に見られる，日本での受け入れ方の変化，つまりより母性的な性格の強い信仰への変化。これは日本人の宗教

意識の大きな特徴を表していると思われる。もちろん母性の宗教という面は，キリスト教の中にもあり，日本人だけに特有なのではないが，しかし日本の宗教には，この母性的な性格がとくに強く見られるようだ。

遠藤周作のこの指摘は，日本人の宗教意識についてのものだが，それは日本の文化や社会の底流に母性原理的なものが色濃くのこっているという捉え方を，一面から強く補強する指摘だろう。

Ⅲ.「森林の思考」と「砂漠の思考」

地理学者の鈴木秀夫は，「森林の思考」と「砂漠の思考」という二類型によって人間の思考の違いを分析する。まずは，人間が周囲の環境を見る際の「視点」の違いが指摘される。森林では地上に視点を置き，その視点から発想する傾向が強く，砂漠では広域を上から鳥瞰するような視点からの発想が強い。森林的思考とは，視点が地上の一角にあり，下から上を見る姿勢であり，砂漠的思考とは上から下を見る鳥の眼を持つことであるという。

森林では，周囲を木々に囲まれる狭い視野から周囲を見渡し，樹林にさえぎられた空を見上げることになる。森林は湿潤地帯であり，食物は比較的豊富で種類も多い。そこでは食物や水をめぐって生死を分けるような重要な決断に迫られることは多くない。全ての物はお互いに相まって存在する。草木が繁茂し，多くの動物が住む森林地帯では多神教が生まれやすい。そして，実が朽ちて土に帰り，また芽生えてくる循環的な輪廻転生の概念も加わる。

これに対し，砂漠で生き残るのに最も重要なことは水を見つけ，食べ物を見つけることだ。そのため，長い距離を移動しなければならず，広範囲を視野に入れて行動する必要がある。遠くの泉に今，水があるかないか，生死を分ける決断をして行動しなければなない。それゆれ砂漠民は，鳥のように上から自分と全体を認識する必要に迫られる。そして，砂漠的思考の「上からの視点」が，天，すなわち一神教の神を生み出したというのである。広大な砂漠の中で人間は，風に飛ばされる砂粒と変わらない。そんな人間と万物を創造し，支配するのが絶対的な神であるという一神教が成立する。時間も空間も含めてすべてが，この絶対神によって創造されたのである。一神教の神のイメージは，砂漠の風土と砂漠民の生活に密接に関係しつつ成立した。

森林の思考とは，極端に言えば「世界は永遠に循環し，続く」という思考であり，砂漠の思考とは，逆に「世界は始まりと終わりがある」というものだ。

こうした思考の違いはやがて，キリスト教的な世界観と，仏教的な世界観のとの違いへと発展していく。しかしそれは，どちらが優れているとか，どちらが正しいとかの問題ではなく，森林あるいは砂漠という，それぞれその風土に生きるために必要な思考から生じた違いである。

こうして，多神教や，さらには仏教を生んだのが森林であり，ユダヤ教やキリスト教そしてイスラム教を生んだのが砂漠であった。歴史的に言えば，人類は狩猟・採集の時代には，圧倒的に森林的な思考が優位であった。森林に囲まれた環境では多神教的な宗教が生まれ，砂漠の環境では一神教的な宗教が生まれる傾向が強い。人類が農耕・牧畜を始めるころから，一神教的な文化の影響が徐々に森林的な思考の世界にも広まっていった。

ただし森林と砂漠とは言っても，必ずしも現在の気候風土とそのまま合致してはいない。今から数千年前に地球が砂漠化していた頃につくられた思考方法を人類は綿々と受け継ぎ，こうした思考方法が現代の人間に対しても明らかに大きく影響している。森林的思考を代表する地域は日本である。対して砂漠的思考を代表するのは，欧米諸国である。以上の考察から，森林的思考が母性原理の文化に対応し，砂漠的思考が父性原理の文化に対応することは，容易に推察できるであろう。

鈴木が考察した「森林の思考」と「砂漠の思考」の違いは，かつて人類が経験した気候変動と世界史の展開のなかでも，大枠としては確認できるだろう。狩猟・採集の時代には「森林の思考」が優位であり，それゆえ宗教も自然崇拝的で母性的な性格のものであった。やがて人類が農耕を開始しても，豊饒な大地を基盤にする母性的な宗教が支配的であった。

農耕の開始は，大地を母とし，農耕を生殖活動と同じとみなす母性的宗教の世界観と結びつ

く。世界に広く出土する土偶も，豊饒な母なる大地をあらわす地母神である。それは多産，肥沃，豊穣をもたらす生命の根源でもある。地母神への信仰は，アニミズム的，多神教的世界観と一体をなす。

しかし，古代地中海世界では紀元前1500～1000年頃に大きな世界観の変化があったという。それまでの大地に根ざす女神から，天候をつかさどる男神へと信仰の中心が移動したというのだ。これには紀元前1200年頃の気候変動が関係しており，北緯35度以南のイスラエルやその周辺は乾燥化した。その結果，35度以北のアナトリア（トルコ半島）やギリシアでは多神教や蛇信仰が残ったが，イスラエルなどでは大地の豊饒性に陰りが現れ，多神教に変わって一神教が誕生する契機となったという。

これまで大地の恵みに頼れば生きていけた時は，地下の蛇や大地母神が信仰されたが，乾燥化が進むと嵐や雷に関係する天候神バールや唯一神ヤーウェの信仰が強大化した。この信仰の変化に関してもうひとつ重要なのは，牧畜民が砂漠を追われて農耕民のオアシスや河畔に侵入し，侵略したことだ。牧畜民は天の神を信じていたので，これも天候神の確立に大きく寄与した。

さらに紀元前1200年頃の気候の悪化をきっかけにして，トルコ・アナトリアのヒッタイト帝国が崩壊し，それまで彼らが独占していた鉄器の制作技術が周辺に広がっていった。これにより世界史は，青銅器時代から鉄器時代へと移行していった。この変化は「青銅器時代の崩壊(Bronze Age collapse)」とも呼ばれる。

これらが背景となって紀元前1200年頃，ユーラシア大陸の広範な地域で，よく似た神話が語られるようになった（ギリシア神話のゼウスにも，中国南部のハニ族にも似たような神話があるという)。その共通点は次のようなものであるという。

第一に，古い神（蛇の姿の大地母神）と新しい神（人間の姿をした天候・嵐の男神）との闘い。次に，新しい神は，あごひげをはやした男神（鉄器をたずさえたバール神など)。そして最後に，天候神と大蛇の闘いは，一度は大蛇が勝利するが，美女の助けで天候神は復活を果たし，勝利する。

これは，大地の豊饒性の低下の中で，信仰の中心が大地から天へと移動し，同時に男性の権力が増大したことを物語る。母権社会から父権社会への転換を意味していたとも言えよう[4)]。

つまり，世界史を大きな流れとして母性原理，父性原理の視点から考えるなら，狩猟・採集社会は母性原理が強く，農耕・牧畜の社会では母性原理を基盤にしながら，そこに父性的な原理も入り込んできたといえよう。さらに多神教・一神教という区分でいうなら，狩猟・採集社会におけるアニミズム的な自然崇拝では母性原理が強く，農耕・牧畜が開始されると，精霊崇拝からある程度明確な多神教という形をとるようになり，気候変動や牧畜民との接触を通じて多少ととも父性原理的な一神教的要素も入り込んでくる。そして一神教は，ユダヤ教，キリスト教，イスラム教という「地中海三宗教」において出現し，かなり父性的な性格の強い文明の基盤となっていくのである。

Ⅳ．縄文文化の母性原理

ところで，気候変動による東地中海の旱魃，ヒッタイト王国の崩壊，「海の民」のエジプト侵攻・ミケーネ文明の衰亡が続いた「紀元前1200年のカタストロフ」のころ，日本列島は縄文時代の「後期」にあったが，世界的な気候変動や民族移動の影響をあまり受けていない。縄文時代は，新石器文化の定住段階に属するが，例外的に本格的な農耕をもたず，豊かな自然との深い共生の関係を1万数千年もの長期にわたって保ち続けた。その意味で世界史上でもユニークな時代・地域である。縄文人が本格的な農耕を持たなかった理由のひとつは，自然の豊かさがそれほど変化しなかったからだろう。降水量に恵まれた風土は，森林の成育にとって好条件となり，温帯地域としてはめずらしい程の豊かな森に恵まれた環境が維持された。この好条件と煮炊き用の土器の使用とにより，一部農耕を取り入れながらも，狩猟・漁撈・採集を中心にした縄文文化を高度に発達させ，しかも長く存続させることができたのである。そして，圧倒的な森の文化は，豊かな森に根差す母性原理の文化であった。

縄文文化の母性原理的な性格をより詳しく探ってみよう。縄文時代は文字が残っていない

ので，縄文人の心や信仰を探る材料は，土偶や土器などの遺物に頼るほかないが，最近，土器の精緻な分類だけにとどまらず，総合的な視野から縄文人の精神性に迫ろうとする考古学者の研究がいくつか見られるようになった。その一つが渡辺誠の『よみがえる縄文の女神』である。著者は「弥生時代の米づくり文化を築く土台となった縄文文化には，自然との共生で培った高度な技術と多様な生活様式，そしてそれらを支える輪廻の思想，死と再生の祈りやいのちを尊ぶ女神信仰が確かに存在した」[5] という立場から，その精神文化のエッセンスが記紀神話へと引き継がれていったと主張する。

たとえば土偶は，女性の出産能力に象徴される女神の霊力を宿す。その多くはあらかじめ壊すことを目的につくられ，新たな生命の復活とムラの甦りのために，意図的にバラバラにして葬られたという。人面・土偶装飾付土器は，女神の顔または身体を口縁部にもち，土器の本体は女神の身体を意味する。つまり自身を焼いて生み出された食べ物が新しい命であり，日本神話のイザナミやオオゲツヒメの姿を連想させる。

また考古学者の大島直之は，従来の物質的・技術研究的な考古学の枠を飛び出し，縄文人の精神性に迫ろうとする。彼が取り入れた手法は，ユング心理学の「普遍的無意識と原型（グレートマザー＝太母）」，宗教学の「イメージとシンボル」，そして修辞学の「レトリック」などである。これら人文科学の成果を取り入れながら「神話的思考に基づく縄文世界」に分け入る試みを行っている[6]。

彼は，縄文人の象徴の中核に月があるという。縄文人にとって，満ち欠けを繰り返す月は幾多の死を超えてよみがえる再生の象徴であり，畏敬の対象だった。さらに脱皮を重ねる蛇も，土偶に見られる身ごもる女性も「死と再生」の象徴であった。身ごもりが月からもたらされる「水」（精液）によることを世界中の神話が伝えている。日本の土偶にも「月の水」が涙や鼻水やよだれとして表現されているという。著者は，こうしたシンボリズムをさらに広げて，縄文土器や竪穴式住居やストーンサークルなど多くの遺物の特徴は，縄文人が「不死」「再生」への願いを表現したものとして説明できる主張する。

縄文人の円形の住居や墓，ストーンサークル，さらに貝塚も子宮のシンボライズであった。子宮は，縄文人にとっても，自分が生まれた場所であり，死から甦る再生の場所でもあった。また子宮をもつ女性の生理は，月の運行周期と同じであり，その月もまた「死と再生」を象徴していた。母なる子宮を象徴とする「死と再生」は，ユングのいうグレートマザーという元型と深く結びついており，それは人類の古層の記憶，普遍的無意識につらなるという。

縄文の遺物を，月・蛇・子宮などのシンボリズムで読み解く試みは従来の考古学にとってはかなり挑戦的だろう。これは，これまでなされてきた様々な縄文文化の解釈のうちの一つにすぎないが，縄文文化を母性原理との関連でとらえるうえで，大いに参考になるのは確かだ。ひとつだけ気になるのは，縄文人の信仰を「死と再生」の観点だけからとらえるのは一面的ではないかということだ。縄文人が豊かな恵みをもたらす母なる大地によって生かされ，それに感謝したという信仰の側面を無視することはできないのではないか。

さて，母性原理との関係で，さらの別の縄文文化論を見てみよう。縄文人の遺跡には，貝塚などの遺跡と並んで石群や木柱群がある。上田篤（『縄文人に学ぶ』[7]）は，石群と木柱群が「先祖の祭祀」と「太陽の観測」という二つの機能をもつと考える。縄文人は，太陽と先祖の二つを拝んでいた。

縄文社会は母系社会だったと思われ，しかも豊かな自然を「母なる自然」として敬う宗教心は，元母（がんぼ：グレートマザー＝太母）への畏敬とも重なっていく。母系社会の結婚の形として妻問婚がある。妻問婚は，男が女のもとに通うことで婚姻が成立するが，それは一過性のものである。夫婦としての男女の同棲を伴わず，男が通わなくなることも多い。父は，自分の子どもが誰かに頓着しないが，女にとっては，父が誰であれ，産んだ子は等しく自分の子であり，平等に自分のもとで育てる。

子を持つ女たちは，食糧の採集に明け暮れた。いつくるか分からない男たちはあてにならない。そうした社会では母子間の絆は強くなる。そして氏族の先祖は，母から母へとさかのぼり，ついには「一人の仮想上の女性」に至りつくだろう。それが元母だ。縄文時代に作られた土偶は，何かしら呪術的な使われ方をしたのだろうが，

それは元母の面影をもっている。

そして火は，太陽の子であった。ところで太陽と先祖とはどのように結びつくのか。縄文人は，氏族の先祖を遡ったおおもとに元母のイメージをもっていただろう。その元母と太陽の両方の性格をそなえていたのは，女性神アマテラスである。元母の根源にアマテラスを見ると，先祖信仰と太陽信仰は完全につながるというのである。つまり縄文人の宗教心は，母系社会の先祖信仰と「母なる自然」への信仰，その大元としての太陽信仰とが結びついていたのではないか。

父系社会では，力の強い男が多数の女を抱えてたくさんの子どもを産ませ，「血族王国」を作りたがる。その結果，権力をめぐって男同士の争いが始まる。ところが母系社会では，男に子どもがない。女の産む子どもの人数には限りがあり，しかも女は子供を分け隔てなく育てるから争いも起きにくい。母系社会では，母はすべての子とその子孫の安寧を平等に願う傾向があるから，血族集団は争いなく維持され，社会は安定した。ここに縄文時代が一定の文化とともにかくも長く続いた秘密のひとつがあるのではないか。

こうして縄文時代は女性中心の時代であり，その伝統は後の時代に引き継がれた。父系性の結婚制度に移行したあとも，家の中での女性の力が比較的強かったのは，その伝統を受け継いでいるからだろ。「刀自（とじ）」「女房」「奥」「家内」「お袋」「主婦」などの言葉は，多かれ少なかれ家を管理する意味合いを持つ。日本では今でも主婦が一家の家計を預かるケースが多いが，欧米ではそのようなことはないという。

以上，いくつかの論考により，縄文文化の母性原理的な性格を確認した。母なる自然を崇拝する母性原理の縄文文化，その1万数千年は，大和朝廷成立以降の日本の歴史時代に比べ10倍近くも長い。この圧倒的に長い縄文時代に育まれた心性が，その後の歴史時代の日本人の心性の基盤なり，その心の深い層を形成しているといえるだろう。

しかも，その後大陸から流入した本格的な稲作は，牧畜を伴っていなかった。牧畜は，大地に働きかける農耕よりも，生きた動物を管理し食用にするという意味で，より自覚的な自然への働きかけとなる。つまりより男性原理が強い。そして牧畜は森林を破壊する。日本列島では，稲作農耕が開始されても牧畜を伴わなかったために豊かな森が残った。さらに島国であるため，遊牧・牧畜民の直接侵入が難しかったことも，母性原理の文化が存続したことの大きな理由の一つだろう。これらの条件が重なり，砂漠，遊牧，牧畜を背景とする父性原理の一神教の文明は，ついに日本列島に根を生やすことができなかったである。

Ⅴ.「甘え」と母性原理

明治維新以降の日本は，キリスト教を基盤とし父性原理の支配的な西欧の近代文明や社会制度を積極的に導入し，近代国家として出発した。近代化とは，西欧の科学文明の背景にある一神教的な世界観を受け入れ，文化を全体として男性原理的なものに作り替えていくことだともいえる。近代文明を受け入れた国々では，男性原理的なシステムの下に，農耕文明以前の自然崇拝的な文化などはほとんど消え去る傾向が強い。それどころか，農耕文明が開始された時点で，それ以前の狩猟・採集時代の文化の記憶の大部分を失っていく。ところが日本文明は，近代化にいち早く成功しながら，その社会・文化の中に縄文以来の太古の層を濃厚に残しているように見える。つまり原初的な母性原理の文明が，現代の社会システムの中に色濃く生残っている例外的な近代国家が日本なのだ。

現代の日本が，母性原理の強い社会であることは，先に言及した河合隼雄の「母性社会」論以外にも，いくつかの研究がある。日本人の心理を「甘え」という観点からみごとに描き出した土居健郎の『「甘え」の構造』もその成果のひとつであろう[8)]。これは，「日本人論」「日本文化論」の代表的な著作のひとつとして有名である。

甘えは，本来人間に共通な心理でありながら，「甘え」という語は日本語に特有で，欧米語にはそれにあたる語がない。ということは，この心理が日本人や日本の社会にとってはとくに重要な意味を持ち，それだけ注目されるということだろう。それは，甘えを許容するような社会構造が日本には存在することを物語る。この言葉は，日本の社会構造を理解するためのキー概念

ともなるというのだ。

土居は，日本で理想的な人間関係とみなされるのは親子関係であり，それ以外の人間関係はすべてこの物指しではかる傾向があるのではないかという。ある人間関係の性質が親子関係のように細やかになればなるほど関係は深まり，そうならなければ関係は薄いとされる。この理想とみなされる親子関係は，もっとも理想的な形では母子関係が想定されているのは言うまでもない。

親子関係だけは無条件に他人ではなく，それ以外の関係は親子関係から遠ざかるにしたがって他人の程度を増す。この事実は「甘える」という言葉の用法とも合致していると土居は指摘する。つまり親子の間に甘えが存在するのは当然である。しかも甘えは，母子関係の中にこそ，その原形がある。これは，幼児と母親の関係を思い出せば誰もが納得するはずだ。とすれば日本人はやはり，母子関係のような利害が入り込まない一体性を無意識のうちにも人間関係の理想と見ているのである。

だからこそ，「甘え」という言葉が日本語の中で頻繁に使われる。それだけではなく甘えの心理を表現する言葉が他にも多数存在していて，それらを分析すると日本人の心理構造がはっきりと浮かび上がってくるというのである。その分析に説得力があったため，以後「甘え」の語は，日本人の心理を語るうえで欠かせないキーワードとなった。

たとえば「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」はいずれも甘えられない心理に関係するという。すねるのは素直に甘えられないからであり，しかし実際はすねることで甘えているともいえる。「ふてくされる」「やけくそになる」は，いずれもすねが高じ，なお甘えられない結果である。ひがむのは，甘えたいのに自分だけが甘えられないと曲解することである。ひねくれるのは，甘えないでかえって相手に背を向けることだが，どこかに甘えの感情があるからそうなるのだ。

土居は，この他「たのむ」「とりいる」「こだわる」「気がね」「わだかまり」「てれる」など日本人に馴染みの感情を甘えの心理との関係で分析していくが，ここではひとつだけ「遠慮」という言葉と甘えとの関係を取り上げよう。

「遠慮」という日本語は，現代では人間関係の尺度を測る意味合いで使われるようである。たとえば親子の間には遠慮がないが，それは親子が他人ではなく，その関係が甘えにどっぷりと浸かっているからである。この場合，親も子供もたがいに遠慮がない。親子関係以外の関係では，親しみが強いほど遠慮は少なく，親しみが薄くなるほど遠慮は増す。親友同士は遠慮がないが，遠慮を感じる友人もいる。要するに日本人は，できれば遠慮のない関係がいいと感じ，遠慮し合う関係をあまり好ましいとは思っていない。これも，日本人がもともと親子関係，とくに母子関係に典型的な一体感をもっとも望ましいものとして理想化しているからだろう。

土居はまた，「甘えと自由」について論じている。日本人の甘えの心理を，歴史的な視野から考えていくきっかけとしても興味深い。

まず著者は，西欧的な自由の観念を，歴史的に古代ギリシアやローマの自由人と奴隷の区別に発するものと見る。すなわち自由とはもともと奴隷のように強制的に縛られた状態ではないことを意味した。だからこそ自由は，人間の権利や尊厳という考え方と結びいて，守るべき価値のあるものとなったのだろう。また西欧では集団に対して個人の自由が重視される。

これに対して日本で古くから使われていた自由という言葉は，「自由気まま」という表現が暗示するように，もともと甘えの願望とかなり関係が深いという。つまり西欧語の翻訳としての意味が入り込む以前は，自由とは甘える自由であり，つまりはわがままな態度を意味したのである。集団に対して自由勝手，わがまま勝手にふるまうのは，集団からの独立としての自由というよりは，集団への甘えや依存を前提としている。日本的自由はもともと甘えに発するのであり，甘えは他を必要とし，個人が集団に依存していることを前提としている。

これに対して西欧では，個人の自由を重視する一方で，甘えに相当する依存的感情が軽視されてきた。西欧的な自由は甘えの否定のうえに成り立っているのである。「神は自ら助くる者を助く」という諺は，本来はユダヤ・キリスト教の伝統とは無関係らしいが，その意味は「万人が万人にとって敵である世にあって，自立自衛以外には頼むべきものがない」ことを意味したという。

とすればこれは，「旅は道連れ，世は情け」と

か「渡る世間に鬼はなし」などという日本的な諺とは正反対の精神と社会を反映していると言ってよいだろう。ということで自由と甘えの問題は，男性原理の社会と女性原理の社会の違いにも深く関係し，その違いをある程度反映しているとも言えよう。

Ⅵ.「タテ社会」と母性原理

さて，現代の日本社会が父性原理よりも母性原理を基底として成り立っている事実は，社会人類学者の中根千枝が，現代日本の社会構造を「タテ社会」という観点から分析した結果からも読み取ることができる[9]。土居健郎も，日本人の甘えに対する偏愛的な感受性が，日本社会におけるタテ関係の重視と深く関係していると指摘している。

甘えとタテ社会とは，どのようにつながるのだろうか。日本がタテ社会だというのは，タテの人間関係つまり上下関係が厳しいということだという誤解があるかもしれない。しかしこれは俗説であり，欧米の会社での管理者と労働者との上下差の方がはるかに大きく，厳しいという面もある。

タテ社会とは，ヨコ社会と対をなす概念である。タテ社会は，場を基盤とする社会であり，場とは，人間同士が直接的なエモーショナルな関係を結ぶことが可能な空間，そのような直接的な関係が大きな意味をもつ空間である。たとえば「イエ」という場においては，他家に嫁いだ血をわけた自分の娘や姉妹たちより，よそからはいってきた妻，嫁の方がはるかに重要な意味をもつようになる。その場でともに生活した時間が重視されるのである。

日本人は，外（他人）に対して自分を社会的に位置付ける場合，資格よりも場を優先する。自分を記者，エンジニア，運転手などと紹介するよりも，「A 社のものです」「B 社の誰々です」という方が普通だ。これは，場すなわち会社・大学などの枠が社会的な集団認識や集団構成に大きな役割を果たしているということである。すなわち記者，エンジニアなどの資格によるヨコのつながりよりも，会社や大学などの枠（場）の中でのつながり（タテの序列的な構成になっている）の方がはるかに重要な意味をもっているということである。

日本人にとって「会社」は，個人が一定の契約関係を結ぶ相手（対象・客体）としての企業体というより，「私の会社」「ウチの会社」として主体的に認識されていた。それは自己の社会的存在や命のすべてであり，よりどころであるというようなエモーショナルな要素が濃厚に含まれていた。つまり，自分がよりかかる家族のようなものだったのである。もちろん現在このような傾向は，終身雇用制の崩壊や派遣労働の増加などで，かなり失われつつある。しかし，それに替わってヨコ社会が形成されはじめたわけではなく，依然として日本の社会は基本的にタテ社会である。

終身雇用制が崩壊していなかったころは，会社の従業員は家族の一員であり，従業員の家族さえその一員として意識された。今でもその傾向はある程度残っているだろう。日本社会に特徴的な集団は，家族や「イエ」のあり方をモデルとする「家族的」な集団でなのである。そして家族が親と子の関係を中心とするのと同様の意味で，集団内のタテの関係が重視される。そこでは，家族的な一体感や甘えの心理が重要な意味をもってくるのは当然である。

日本のような「タテ社会」では，企業別，学校別のような縦断的に層化した集団が形成されるが，それは資格の違う人々が，ともに生活したり働いたりする場の共通性によって，枠に閉ざされた世界を形成するということである。日本の企業別労働組合のように職種（資格）の違う人々が，同じ会社という場の共通性によって集団を作るのである。

資格の異なる人々を含む集団の構成員を結びつけるのは「タテ」の関係である。それは，同列におかれない A・B を結ぶ関係である。これに対して「ヨコ」の関係は，同列にたつ X・Y を結ぶ関係である。ヨコの関係は，カーストや階級などに発展し，タテの関係は，親子や親分・子分の関係に象徴される。タテ社会は，集団内の序列を重要視する構造になる。その場合序列は，どれだけその場に長く所属していたか（つまり年功）によって形成されるのが基本になる。

タテ社会での親子的な上下関係は，下にどんどんつながっていく。子が誰かの親になり，その子がまた誰かの親になりというのと類似した形で集団が構成されるのが基本になる。こうした集団でのリーダーシップは，逆に大きな制約

を受ける。なぜなら，その集団のリーダーは，直接その成員のすべてを把握しているのではなく，リーダーの子にあたる直属の幹部を通して把握しているからだ。ということは，リーダーに直属する幹部の発言権がきわめて大きいことである。各幹部は，ある意味で，それぞれの支配下の成員の利益を代表するから，リーダーは，その力関係の調整役を強いられるのだ。

さらに，リーダーとその直属幹部との関係は，タテの直接的な人間関係であるため，親分・子分的なエモーショナルな要素によって支えられている。そこに濃厚なのは，保護と依存，温情と忠誠といった言葉で表現される関係であり，「甘え」の心理と深く通じる関係なのだ。しかもこの関係は，各幹部とその成員，さらにその下の成員という風に，最下部まで一貫している。もちろん，日本のすべての集団がこのような構造をもっているわけではないが，社会構造の基本がこのような特徴をかなり色濃く残していることは確かだろう。

以上のように，土居健郎が明らかにした「甘え」という心理構造が，「タテ社会」という日本社会の構造と密接に結びついて成り立っていることが明らかになる。つまり「タテ社会」は甘えの構造を介して，母性社会日本の一側面をなしているのだ。

では，日本の社会の集団形成では，なぜ場におけるタテの人間関係が，他のあらゆる人間関係に優先して認識されるのだろうか。

ひとつの理由は，日本の歴史においてヨコ社会が形成される要因がなかったからだろう。ヨコ社会の背景には，民族と民族の激しい闘争，一民族による他民族を支配という歴史の繰り返しがあった。ある民族の侵入と支配によって奴隷的な立場に追いやられた民族が，やがて全体として下層階級を形成していくことは，歴史上多く見られたことである。インドのカースト制度も，その元をたどれば，インドに侵入したアーリア人と先住の人々との支配 - 被支配関係に端を発している。これに対して日本では，他民族による侵入と支配によって隷属的な立場におかれたという歴史上の経験がなかったので，他民族の支配に対してヨコ社会を形成する契機が生まれなかったのである。

もうひとつの理由は，上の理由と重なるが，日本列島がほぼ同一民族によって成り立っていたからである。言語や文化が違う多くの民族が混在する社会では，まずそれらの各民族がヨコ社会を形成しやすい。異民族同士が，一地域にどんなに長く共存したとしても，場の共有による同一集団を生み出すことはほぼ不可能である。同じ言語と文化を共有する人々が，他民族の侵入によってかき乱されることもなく，長い年月をともに平和に生活してきたからこそ，生活空間を同じくし，直接的につながる場での人間関係を優先する社会を作ることができたのだ。しかもそこで重視されるのは，家族関係を理想とするような親密な関係であり，そのような親密な関係だからこそ，「甘え」もまた認められ，社会のなかで大切な意味をもったのだろう。

なぜ日本にヨコ社会が成立せず，タテ社会を中心とする社会が形成されたのかについての，以上のような説明は，本稿に最初に触れた，日本文化を理解するための 9 項目のうち，(3) や (5) と深く関係するのは言うまでもない。

すなわち，周囲を海で囲まれた島国への遊牧・牧畜民の直接侵入が難しかったため，日本は，他民族による侵略，闘争や被支配の経験がないから，縄文・弥生時代以来，一貫した文化の継続があり，ヨコの関係を作る必要がなかった (5)。それゆえ，大陸の父性的な性格の強い文化に対し，縄文時代から現代にいたるまで一貫して母性原理に根ざした一体化した社会と文化を存続させることができたのである (3)。

こうして，「甘え」や，それを社会構造的に支える「タテ社会」は，縄文時代以来の連綿として続いてきた日本社会の母性原理的性格と密接に関係し，その一側面として成り立っているのである。

Ⅶ. 母性原理社会・日本の意味

戦後における日本人論，日本文化論は，R. ベネディクトの『菊と刀』[10] で，日本の文化を「恥の文化」とし，西欧の「罪の文化」と比較したのに始まると言ってよいが，それは同時に二類型による比較文化論の代表例でもあった。この本は今日まで読みつがれ，またこの本に影響を受けたり，それを批判的に乗り越えようとするなどして，その後様々な日本人論が生まれた。母性原理の日本を論じる本稿とこの本の主題は，直接関係しないのでその内容にまでは立

ち入らない。

しかし，ベネディクトが，日本を「恥の文化」と捉え，西欧の「罪の文化」は内面的な行動規範を重んじるのに対し，恥の文化は外面的な行動規範を重んじるとしたとき，そこに価値判断が忍び込んでいたのは確かなようだ。恥という外面的な行動規範より，罪という内面的な行動規範のほうが優れているという密かな価値判断が見え隠れするのである。さらに言えば，「罪の文化」には，内面的で自律的な行動規範を重視する「近代的自我」に対応し，「恥の文化」には，外面的で他律的な行動規範に影響される「非近代的自我」が対応する。そしてベネディクト以来の，欧米人による多くの日本人論がまた，このような欧米的な価値観を基準にした分析だったのも確かである。

欧米の研究者だけではなく日本人の研究者が日本の社会や文化，そして日本人のこころの在り方を論じるときにも，西欧的な価値基準を絶対視し，それによって日本の在り方を論評するという姿勢から自由になっていない場合がいまだに多い。特に「近代的自我」は，近代民主社会の基盤としてほとんど絶対視される傾向があった。近代的自我を唯一の正しい在り方として捉えるかぎり，日本人の自我の在り方が批判的にしか見れないのは当然であろう。そこから「日本人には自我がない」とか，自己主張が弱く集団に埋没するだとかいう批判が生まれる。

しかし，日本人の自我が西欧人の自我に対して発達が遅れた劣ったものする見方は危険である。すでに見たように日本人は，外（他人）に対して自分を社会的に位置付ける場合，資格よりも場を優先する。資格によるヨコのつながりよりも，会社や大学などの枠（場）の中でのつながり（タテの序列的な構成になっている）の方がはるかに重要な意味をもっている。日本人のアイデンティティは，その個人が所属する「場」によって支えられる傾向がある。そして日本人の自我は，つねに「場」に開かれており，「場」との相互関係のなかで変化する。自他の区別は弱く，自我は曖昧な全体的関連のなかにあり，また自らの無意識との切り離しも強くない。そしてこの事実は，すでに確認してきたように，日本が縄文時代に深い根をもつ母性原理の強い社会を歴史的に形成してきたことと深く関係し，この母性原理の社会こそが，日本人の自我形成の基盤となっている。

一方，西洋で生まれた「近代的自我」は，父性原理の一神教，とくにキリスト教の伝統を背景にして生まれたと言えよう。「包含」よりも「切断」を特徴とし，物事を明確に区分する父性原理の思考法は，個の独立という考え方と結びつきやすい。しかし，もちろん最初から個人主義や近代的自我が確立されていたのではなく，キリスト教の伝統が根強かった中世には，個人の意思や欲望が尊重されていたわけではない。父性原理の宗教の基盤の上に，絶対的な神との長い関係と戦いの中で，徐々に人間の自由意志や主体性を確立するに至った。父性原理的な宗教の伝統の中にあり，それに支えられていたからこそ，「個人」の重要性を認識するようになったのだろう。

ここで，本稿の冒頭近くで触れたことをもう一度確認したい。「母性原理」と「父性原理」にしても，あるいは「母性宗教」と「父性宗教」にしても，それは価値的な優劣を意味するものではない。現実の宗教そして文化は，両要素がさまざまに交じり合い融合しており，ともに重要な働きをなしている。どちらが強く働いているかの違いがあるだけである。だとすれば，父性原理をその背後にもつ「近代的自我」を基準として，母性原理に根差す「日本的自我」を一方的に批判するのは，あまり生産的とは言えないであろう。

西洋近代における自然科学の急速な発展は，「近代的自我」の目覚めと無縁ではない。自然対象を自我と切り離し，客観的な観察対象とする姿勢は，観察の意志を持った自律的な主体の成立と分かちがたく結びついている。そして観察者の状況に左右されない「普遍性」をもった科学的な知は，その応用である科学技術と相俟って，全世界を席巻する強大な力となり，その結果，非西欧世界の大部分が植民地化されていったのである。

西洋のような父性原理の一神教を中心とした文化は，母性原理の多神教文化に比して排除性が強い。対立する極のどちらかを中心として堅い統合をなし，他の極に属するものを排除しようとする。排除の上に成り立つ統合は，平板で脆いものになりやすい。キリスト教を中心にしたヨーロッパ文化の危機の根源はここにあるかも知れない。

そして父性原理を背景とする西欧の「近代的自我」も同様の危機をはらんでいると言えよう。それは，ひたすら科学の進歩や経済の発展を目指して突き進む男性像が中心的なイメージとなっている。そのような自我のイメージと相容れない要素が，抑圧され排除される傾向が強いのだ。具体的には，女性的なもの，異端，異教，異文化，無意識，そして病や死だ。とくに異端の排除や異教との戦いがどれほど熾烈で，多くの犠牲を伴ったかは，その残虐な歴史を一瞥すれば明らかだろう。

これに対し日本人の精神性の根底には母性的なものが横たわり，物事を区分したり一つの極を中心として堅く統合しようとする傾向は弱い。むしろ両極端をも包み込んでいくような融合性，曖昧性を特性とする。父性原理の伝統に根差した近代西欧は，自我を対象から切り離し，客観的に分析する方法を徹底的に洗練させていった。それに対し母性原理の伝統に育まれた日本文化は，融合性や曖昧性，自然との一体性や，仏教で説かれるような宇宙との融合（「悟り」）というあり方を洗練させたのである。

このような日本文化や日本人のこころの在り方は，その独特の美学とも結びついている。それが「曖昧の美学」だ。「曖昧」は成熟した母性的な感性であり，母性原理と結びついている。単純に物事の善悪，可否の決着をつけない。一神教的な父性原理は，善悪をはっきりと区別するが，母性原理はすべてを曖昧なまま受け入れる。能にせよ，水墨画にせよ，日本の伝統は，曖昧の美を芸術の域に高めることに成功した。それは映画やアニメにも引き継がれ，一神教的な文化とは違う美意識や世界観を世界に発信している。また日本が，かつては中国文明，さらには欧米の文明をほとんど抵抗なく吸収できたのも，あらゆるものを区別なく受容するこの融合性によるのかもしれない。

重要なことは，「日本的自我」の在り方を「近代的自我」と比較し，劣ったものとして批判することではない。むしろ，日本人の自我の在り方の特性を歪めずに，優劣の判断から自由に，事実として正確に把握することである。我々は，すでに西欧で生まれてた科学技術や社会制度を大幅に受け入れ，これからも維持し，発展させ続けるだろう。それは父性原理も基づく制度を受け入れ，それを枠組みとする社会に生きているということなのだが，自分たちの特性を充分に理解しないまま受け入れたため，あちこちで混乱を生じているのも事実だ。その混乱を少なくするためにも，自らの在り方への十全な自覚がますます大切になる。その自覚によってこそ混乱への正しい対処法が生まれてくるのだ。

また，現代の国際関係は，父性原理の力学で動いているもの厳然たる事実だろう。それは，西欧で繰り返された敵対と闘争と排除の熾烈な歴史の，その負の遺産をまぎれもなく引きずっている。そこに自らの母性原理を充分に自覚しないまま関わることで，日本に無用な混乱や不利益が生じている場合がある。国際関係で不利益を被らないためにも，彼我の違いを明確に認識しておくことが必要だ。先進 7 ヶ国首脳会議（G7）において，非キリスト教圏からの参加，つまり母性原理の国からの参加は日本だけである。その意味を自覚して行動すべきだろう。さらに言えば，自らの母性原理に根差す在り方を充分に自覚し，それをこれからの世界にどう生かせるか，その積極的な意味を模索していくことこそが，今後の日本にとってきわめて重要な課題となるであろう。

【文献】

1) 河合隼雄（1976）母性社会日本の病理　講談社　8-20 参照
2) 鈴木秀夫（1978）父性的宗教　母性的宗教　日本放送出版協会　20-31 参照
3) 遠藤周作（1992）切支丹時代 — 殉教と棄教の歴史　小学館　206-211 参照
4) 安田喜憲（1994）蛇と十字架　人文書院　100 参照
5) 渡辺誠（2013）よみがえる縄文の女神　学研　15–16 参照
6) 大島直之（2014）月と蛇と縄文人 — シンボリズムとレトリックで読み解く神話的世界観　参照寿郎社　26–90
7) 上田篤（2013）縄文人に学ぶ　新潮社　171-173 参照
8) 土居健郎（1971）「甘え」の構造　弘文堂　23-108 参照
9) 中根千枝（1967）タテ社会の人間関係　講談社　28-67 参照
10) ルース・ベネディクト（1967）長谷川松治（訳）菊と刀 — 日本文化の型　社会思想社

The Maternal Principle of Japanese Culture and its Meaning

Noboru ISHII

Teikyo Junior College

【abstract】

This paper examines the "the maternal principle character" of Japanese culture from several angles, including its historical background, and considers its meaning in today's international society, where "paternal principle character" is strong. The paternal principle is characterized by the function of "cutting" and divides everything into subject and object, good and evil etc. The maternal principle has the property of "encapsulating" everything and treats everything equally that wraps. The various religions and cultures of the world work with fusion of these two principles, but in many cases, one is dominant and the other is oppressed.

Japanese culture has an overwhelmingly strong maternal characteristic. Religiously, monotheism such as Judaism, Christianity, and Islam has a strong paternal character, and polytheism has a strong maternal character. Since the Jomon period, Japan has been blessed with abundant nature and forests, and has fostered a polytheistic culture with a strong maternal principle. This is clearly reflected in the psychological structure of "amae" and the social structure of "vertical society" of modern Japan.

It can be said that the modern international community is driven by the dynamics of the paternal principle, which drags on the negative legacy of the history of hostility, struggle and exclusion in Western Europe. In this situation, Japan should be fully aware of the meaning of the culture of the maternal principle that it has inherited, and it is an important task to seek out the positive meaning of how to utilize it in the future world.

【Key words】Japanese culture, maternal principle, paternal principle, amae, vertical society